じんけん瓦版 第52号

発効日：2014年4月20日

発行：日本聖公会東京教区　人権委員会

原発・放射能問題は人権問題

郡山聖ペテロ聖パウロ教会　司祭　越山健蔵

3年目の3.11を迎えました。全国各地で大震災の鎮魂の祈りが捧げられました。新聞・テレビ等のメディアもこぞって特集を組みました。3月10日～12日の全国紙・地方紙共通におかしなことに気がつきました。それは以前のような絆・希望・元気といった文字・写真が紙面に溢れていました。いまだ故郷を追われ 16 万人にも方々が仮設住宅の生活を余儀なくされ益々困難な状況に福島は置かれているのに、仮設での生活の苦しむ人々の姿、声はほとんど紙面から消えていました。おそらくこれらはすでにニュース的な価値は失われているのかも知れません。被災地では震災以来時間が止まっています。今も社会的、精神的な被害が深刻な状況は全く変わるどころかより深い闇が覆っています。

時間の経過とともに、少しずつ震災が風化しつつあるように最近のニュースの取り上げ方にも微妙に変化を感じます。

人権の侵害…

人権を一言で言い表すなら､人が生きる権利です。放射能のために今普通に生きてきた権利が剥奪されています。差別される側に置かれた自らの体験ですが、福島の住民であることを改めて自覚させられています。昨日の地元の新聞で、避難した中学生が福島出身であることを、普通に言えなくなりました。何故なのか自分でもわかりません、言えない自分が悲しいと書かれていました。とてもその気持ちが伝わってきます。僕もそうですが、風評被害のアリ地獄に自分自身を落としてしまっているからです。情けないのですが昨年、ホテルにチェックインする時住所を郡山と書くのをためらう自分に今さらながらびっくりしました。私の連れ合いに聞くと同じ気持ちだと言います。何人かの人に聞くと同じ答えが返ってきます。

転校先でも同様な話を聞きます。福島っ子と言われていじめの対象になるそうです。絆という文字が一時全国に広がって行きました。福島を助けよう、福島を忘れない…人間の尊厳を感じたこともありました。しかし今あの思いやりは影を潜めつつあります。東京オリンピックを前にして先ほどの希望・復興・元気が踊り始めた途端被災地の人々は切り捨てられました。福島は東京の植民地では決してありません。いつも切り捨てられるのは過疎の貧しい地域です。いつまでも続く仮設生活、復興とは程遠い被災地の現実、プレハブは応急仮設住宅と呼ばれています。せいぜい2年が限度です。薄いベニヤ一枚で仕切られた狭い空間のなかで声を潜めての生活をいつ果てるともなく続けなければなりません。復興住宅の入居はいまだ1パーセントの所もめずらしくありません。広い田畑の中で生活していた人が高層のマンション生活なんて考えたくないかと思います。

故郷帰還をあきらめた人、なんとしても帰りたい人、地域が分断されています。先が見えない精神的ストレス、肉体的にも限界に来て体調を崩される方が増えてきております。福島の震災関連死（1,660人）は津波地震の直接の死者の数（1,607 人）をうわまわりました。人間の尊厳が全く保障されていません。多くのストレスを一杯溜め込んでいます。

仮設に住む方々と地域の人々の間にも軋轢が生まれています。震災当初はほとんどの人が支援を申し出、寄り添っていました。しかし時が経つと様子は変化してきました、東電の保証金が出始めたころから関係はおかしくなっていきました。保証金もらっ

て、昼間から酒・カラオケ・パチンコやって…が地元住民の間で囁かれるようになってきました。お金の恐さを感じます。これだとて、立場が変われば皆同じことをするかもしれません。震災当初2個のおにぎりも分け合って食べたのが、保証金をもらってない人と分け合ったという話は今のところ聞こえてきません。放射能・原発は悪魔の申し子です。人と人との関係を分断しました。それでも人間って悲しい生き物だと思いつつも神様の似姿として創造されたわけですから互いに愛し合う関係が否定されたとは決して思いません。

改善されない環境…不透明な現実

3.11震災から3年の歳月が流れ、原発災害も終息に向かうかと思いきや、相変わらず大量の汚染水が漏れ、唖然とするような30兆ベクレルの数値のものが海に流れ込んだとの報道がありました。また汚染水流出の問題の大きさを表す数値はレベル3に引き上げられました。地元福島の新聞各社はこれらを連日一面で取り上げています。郡山では以前とは格段のスピードで除染が行なわれています。しかし始まるのが遅すぎました。放射能はアスファルトにこびりつき、また地下に浸透し、思ったように線量が下がりません。礼拝堂前の駐車場も除染してやっと0.4マイクロシーベルトになりましたが、目標の0.2マイクロシーベルト（年間1ミリシーベルトの上限数値）には届きませんでした。見た目には少しずつ日常が戻りつつあるかのように見えますが、今も困難な状況はさほど変わりません。

また行き場を失った除去された土が各家の片隅にコンクリートで囲われて放置されている状況にあります。3 年後に移設すると市からは言われていますが、現実感はありません。

いつ戻れるのか希望が見えない仮設の避難生活…

小名浜の近くに富岡、大熊の人々が住む仮設住宅があります。そこで毎週4回開催されているホッコリカフェには毎回 50 名を超える方々がわずか一杯のコーヒーに癒されています。この二つの町は避難地域に指定され、当分の間住み慣れた故郷には戻れない人々です。もう心身ともに疲労の限界にきておられます。仮設の人々の絆の構築と言いながら、関係がむしろ壊れつつあります。自立出来る人、出来ない人の格差が生まれています。教会ができることは実に小さなことです。一杯のコーヒーがこれから先希望へと導くものであるかはわかりません。それでもお互い寄り添いながらしばしの語らいに先行きの不安と戦いながらしばし時間を忘れています。この仮設には大阪教区を昨年退職された木村幸夫司祭が仮設住宅での世話役を3年に亘って小名浜に定住され、小名浜聖テモテ支援センターの顔として皆さんの信頼に応えておられます。心より感謝です。

人々の複雑な胸の内…

周りでは避難を呼びかける声が多々ありましたが、避難したくてもできない事情がある人は決して少なくありません。また努めて放射線について触れないようにしておられる方もおられます。人それぞれの思いの中に介入することの難しさを最近深く思います。自己判断と言えばそれ以上何も言うことは出来なくなります。キリスト者としてどうあるべきかいかなる時も揺れながら自問自答しています。

避難された方、ここに留まった方それぞれに人には言えない辛さを背負いながら、生きています。福島の被災者は今もこれからも厳しい現実に耐えて生き続けなければならないのです。最後に東京の繁栄は福島の苦しみの上にあることを忘れないでいただきたいと思います。福島の原子力発電所は東北のための東北電力ではありません、東京のための東京電力なのです。そしてその後始末、除染を引き受けているのは大手ゼネコン、大手の下請け孫請けの殆どが地元の人々です。原発の被災者がさらなる放射能の被害者となる構図になっていることをご理解ください。

これから先、手探りの中で困難な状況を少しでも改善しつつ、希望を失わず、近い将来以前のような普通の暮らしが出来ることを夢見ながら、祈り求めていくことしか今は考えられません。この震災によって多くのものが失われました。しかしそれに倍するキリストに繋がる大きなお恵みを全国の仲間からいただきました（今も継続して各方面から支援を受けています)。紙面をお借りして心より感謝申し上げます。すべて神の大きなご計画の中にあることを信じながら…。

主に在って

東京電力福島第一原発事故による避難者の痛み

聖公会東京 311ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱﾁｰﾑ　楡原民佳

先日、幼稚園入園を控えたお子さんのお母さんから、「園長先生に『水道水を飲ませます。福島の子だからといって特別扱いはしません。』と言われてしまいました。」というメールが届いた。

3 年前、東京電力福島第一原発の爆発事故によって放出された放射線は、雲にのり雨となって福島県内でも思いもよらぬ場所にまで大量に降り注いだ。この母子の住む町もその一つだ。爆発事故後何日も経ってからその事を知った彼女は、震災の数か月前に生まれた赤ちゃんと都内に避難した。

彼女自身も生まれ育った山あいの木々の緑豊かな町で、家族に囲まれて赤ちゃんを産み育てていたが、ある日突然、頼れる人もいない見知らぬ土地東京の公営住宅の一室で、独りで赤ちゃんを育てなくてはならなくなった。

原発事故以来、子どもへの放射能の影響を考えないことはない。「いつか何らかの異常が出るかも知れない」という恐怖が消えない。避難前の被曝線量がどれほどかは分からない。だからせめてこれ以上の被曝を防ぎたい、そのためにできる限りのことをする、その一心で 3 年間頑張ってきた。

原子力規制委員会によれば、東京都の水道水からは放射性セシウム 134、137 の両方が検出されている（福島県の検出値に対してセシウム 134 は 73.6%、セシウム 137 は 69.2%）。*[1]　幼稚園はその水道水を飲ませると説明した。放射性物質が含まれた水を飲ませることはできない、水筒を持参させたいという母親の願いに、園長は「福島の子だからといって特別扱いしません。」と返事した。

子どものいのちを守るために避難した。必死の 3 年を経て成長した我が子の幼稚園入園は大きな喜びのはずなのに、彼女はまた傷を負ってしまった。

＊　＊　＊

6 年生になったよ。でも私はもうすぐ病気になるのかな。東京の学校で 4 年生になる時、塾行くの？中学受験するの？ってみんなで話してたら、ある子が私に言ったよ。

「〇〇ちゃんは別に考えなくていいんじゃない、どうせ 5 年か 10 年で死んじゃうんでしょ？」

地震の時、家が壊れて窓ガラスが全部割れた。すぐそこまで津波が来た。怖かった。電気もガスも水道も止まって、おかあさんと給水車の列に何時間も並んだ。外で遊んでたら、気持ち悪くなって吐いた。鼻血も出てきて止まらなくなった。家に帰ったら、おかあさんがすごくビックリして、そのあと「逃げるよ」って言われた。何時間も車に乗って遠くの避難所に行ったあと東京に来た。

大好きだった習い事も全部できなくなった。おじいちゃんとおばあちゃんの野菜も食べられなくなった。友だちとも会えない。お父さんとも時々しか会えない。3 年前まで、あの町でキラキラ輝いて、すごく元気でがんばってた私はもうどこにもいない。

来年中学いくのかな？でもあと何年かしたら死んじゃうの？私は汚れてる、放射能がうつるってクラスの子が言ってた。私は大人になれないの？赤ちゃん産めないの？何をがんばればいいの？私はいていいの？

＊　＊　＊

3 年経った今も、都内で 6,507 人もの福島県の方々が避難生活を余儀なくされている。*[2]　少なくとも私が知る限り、避難母子たちの厳しい状況は何も変わらないし、区域外とされ補償もないまま避難せざるを得なかった方々の金銭的、精神的困難は増すばかり。さらに私たちの無知、無関心、無神経が、避難者を大きく深く傷つけている。

あえて申し上げたい。東京電力福島第一原発事故は私たちの問題である。その事故によっていのちを脅かされている避難者の痛みに具体的に向き合わないことは、「福島に帰れ」と言っているのと同じだ。

---

*[1] 原子力規制委員会　環境放射能水準調査結果（上水(蛇口)）　2013 年 10－12 月分
http://radioactivity.nsr.go.jp/ja/contents/9000/8744/24/194_20140131.pdf

*[2] 東京都総務局復興支援対策部　都内避難者人数　2014 年 3 月 13 日時点
http://www.soumu.metro.tokyo.jp/17hisaichi/hp/ninzuu.pdf

人権週間講演会

「人権問題から見た原発事故」

講師　**武藤類子さん**（福島原発告訴団団長）

1953 年生まれ。福島県三春町在住。版下職人、養護学校教員を経て 2003 年里山喫茶「燦」を開く。チェルノブイリ原発事故以来、原発反対運動に携わり、2011 年は「ハイロアクション福島原発 40 年」として活動を予定していた。福島第一原発事故発生以来、住民や避難者の人権と健康を守る活動に奔走している。

日時　**5 月 24 日（土）14：00－16：00**

場所　**牛込聖公会聖バルナバ教会**
（地下鉄東西線　神楽坂駅　矢来口徒歩 1 分）

参加費　**無料**

連絡先　人権委員会　井口司祭　090-1265-5901

ドキュメンタリー
映画上映会

SAYAMA
見えない手錠をはずすまで

狭山事件！

身に覚えのない逮捕から半世紀
32 年の獄中生活を経て今も無実を叫び続ける
石川一雄さん

カンパ：５００円

日　時　5 月 20 日（火）18：45 開演（18：15 開場）
主　催　日本聖公会人権問題担当
場　所　牛込聖公会聖バルナバ教会（地下鉄東西線　矢来町口徒歩 1 分）

本上映会は管区主催の「新任『人権』研修会」のプログラムとして行われます。

連絡先　東京教区人権委員会　井口司祭　（090-1265-5901）